

# われわれ自身の現在と未来はいかに変わるのか変わらぬのか

八月九日の昼下がり、札幌 ムシャール氏の講演は、韓国 大学6102教室で、詩人クロード・ムシャール氏(パリ)の報告から始まった。第Ⅱ大名誉教授の講演通訳をさせていただいた(札幌) 大学、フリア・文化学研究所主催。題して「異語との出会い」。そしてこの時期にこの札幌でなのか。表のとろ、6月28日から8月31日にかけて北海道立文学館で「詩の黄金の庭」と題する吉増剛造展が開催されていなくなった。われわれはこんな貴重な機会に恵まれることはなかった。ムシャール氏はフロイト研究者にして詩人、縁あって上田眞木子氏とともに詩集『オシリス、石の神』を翻訳し、以来クロードの名は皆澤氏の詩集にも登場するし、カリアの時代の記憶をさぐるオルレアンそのの庄岡は、oson Chieの舞台にもなるような間柄であること。これはこの展覧会に合わせて企画されたものであり、夏休みの口中で深々と大学校舎の一室を借りてはあが、吉増氏も聴衆に加わっての実にタイムリーな特別講演であった。

二月月近い多忙な韓国滞在の旨問を綴って札幌を訪れた時に、ユニケーション手段の進歩が言語の創造力を萎ませてしまっている。しかもこの状況に既視感が漂う。19世紀ヨーロッパのラマンズホードルが、産業革命に伴う印刷技術の革新の只中で向かっていた世界相対性ではないか。つまり、マルクスが近代の「無力のミステル」を嘆いた時代と本質的に世界は変わっていない。

これもまたクロバリエーションの帰結だと言えらば、そこに極東の国のみならず歴史を跡付けるには足りない。クロバリエーシオンが20世紀に進展したのは、帝国主義と全体主義、そして言までもなく両世界戦という大規模な通過を経て。第一次世界大戦の引き金となしたのは20世紀初頭の露露の衝突であったという見方を要するならば、そこに書き込まれた韓国の不幸な歴史は、ローバリエーシオンの真の側面を現在に至るまで世界規模を象徴しているのだ。こうした視点に立つならば、このクロバリエーシオンの中で養われ、詩の言葉たちは、それらうして永遠に消え去った無数の露草を他者なのだ。そんな他者の一人との遭遇がムン

品たりえていくかどうかわず時空を貫通して共舞をすることだろう。つまり他者言葉として聞き届けられるの。ただし、われわれはこれれまで詩、つまり他者の言葉を本当にとらえようとするとき、かたがたに解するの。この問いかけに答える試みとしてムシャール氏の近著『叫び』は位置づけられる。『20世紀の苦悶』と題された副題された『叫び』(2000)は、連強制収容所の、アウシュビッツの、広島・長崎の、そしてカンボジアの、つものは20世紀の政治的暴力の犠牲者証人たちの残した惨害の痕跡を検証している。『叫び』ムシャール、アナン、フマートヴァ、パウルク、エマ、マンテリシユアルム、三言等々。だがこれはアンロシエではない。詩人作家が犠牲者となった例として示されているのでもない。文書、校で作成も彼等も誰かしらえのアンテナ、イティに頼らなければ生き延びられない。彼らはヨーロッパの内部に穿たれた外部を

『叫び』(2000)は、証明書として共有しうる言葉が作られなければならぬ。そのためには、その状況について書かなければならぬ。中々書かなければならぬ。そして言葉が生まれたとき、それは詩と呼ばれるのではないだろうか。これが、『叫び』からロフルと題される次の作に連続されるムシャール氏の詩的実験だとい

『叫び』(2000)は、証明書として共有しうる言葉が作られなければならぬ。そのためには、その状況について書かなければならぬ。中々書かなければならぬ。そして言葉が生まれたとき、それは詩と呼ばれるのではないだろうか。これが、『叫び』からロフルと題される次の作に連続されるムシャール氏の詩的実験だとい

『叫び』(2000)は、証明書として共有しうる言葉が作られなければならぬ。そのためには、その状況について書かなければならぬ。中々書かなければならぬ。そして言葉が生まれたとき、それは詩と呼ばれるのではないだろうか。これが、『叫び』からロフルと題される次の作に連続されるムシャール氏の詩的実験だとい

取の上げた書  
Claude Mouchard  
Qui si chais...? — Papiers 1 — Pamphlet  
Oeuvres-remoiages  
dans les tournants du  
poème (Ed. Laurence Ta  
XXSistèle (Ed. Laurence  
Taper 2007)  
ISBN 978-2-916010-20-  
p.50,21,80euros

を記したのは、もう二年だ。た。その中で、その後の歴史の犠牲者たちを想い、いかに象徴的かつ予言的な叫びをあげたか。また、タルフルから逃れた男の言葉なき叫びを思えば、いかにアンテナを問うか。あるか。証明書とせられる講演であ

講演からちょうど二月後に今度はムシャール氏のオルレンのお宅にお邪魔して伺うことができた。『叫び』が叫びだとして、誰かにはあまも様々な「作品Ⅱ証言」と出合ったときの自分の驚愕を記したいわば個人的な記録だから、売れ行きに何の期待もしていなかったが、熱烈に出版勧めてくれた弱小出版社が辛く追いつまされ、『証明書』には若者たちの間から予想外の大反響が起ったことが、二つのうれい驚きだった。

# ダルフルからロワールへ

世界の暴力の前で詩はなおも可能か?

高橋 純